

雨恋

よく晴れた日だった。

重い扉を軋ませながら開けて、僕は念願の屋上へ到達した。給水塔のタンクの裏へ回り、日のコンクリートに腰を下ろす。涼しくて心地良い。小学校の頃から屋上への憧れがあった。小学校では生憎生徒のみでの立ち入りは禁じられていて、中学校でも同様であった。僕は、高校に入ったから今度こそ屋上へ行くのだと決めていた。涼やかな風に吹かれながら弁当をつつき、友人達と楽しい時間を過ごす。そんな光景に憧れていた。

まあ、今の僕は一人きりな上、弁当の包みも携えてはいない。

ゆっくり頭上を仰ぐ。清々しく晴れ渡った空が、視界を通り越して広がっている。青い。青過ぎる。眩しくなって首を戻し、しばしばとま

山口 珠玉子

ばたきをする。こんなにも、良い天気。僕はここに何をしに来たのか、忘れたわけではない。ひんやりとしたコンクリートから腰を上げ、フエンスに囲まれた屋上の端へ歩み寄る。

僕はここへ、死にに来たのだ。こんなに良い天気なのに。

別段珍しくもない。生きていて面白くないとか、まあ理由をつけるとしたらそんな感じだ。動機なんて後付けされるもの。僕は死にたいから死ぬのである。

フエンスを掴み、見下ろす。校庭の土色の四角が見える。さよなら皆さん。父さん母さん、先立つ不孝をお許しください。そう思って腕に力を込め、身を引き上げようとした時、僕は彼女を見付けた。

彼女は僕を見ていなかった。ただじっと空に

たゆたう雲を眺めていた。

その知的な瞳に見惚れていたら、僕の腕は悲鳴を上げ始めた。そうして身体を支えきれなくなった。僕は見事に屋上側へ倒れ込む破目になった。尻から落ちて、乱暴に手放されたフエンスががしゃんと鳴る。それでも彼女はこちらへ目を向けようとしなかった。

彼女もまた、僕と同じように自殺を考えているのだろうか。一点を見詰めたままの彼女の表情は、よく判らない。憂いているようにも儂んでいるようにも見える。けれど、死ぬようには見えなかった。あまりじろじろ見るのも不躰かと思ひ、僕は取り敢えず目を逸らす。なんだか、死ぬ気を失くしていた。一つの尊い命が失われずに済みました。誰あろう物言わぬ彼女の御蔭です。ありがとう。

結局僕はただ屋上に来て、幼い頃の夢を叶えただけで終わった。何だ。傍から見れば普通の幸せな高校生じゃないか。良かったのか良くなかったのか、そりゃ死なずに済んだのだから良かったには違いないけれど、何だかな、と思つて僕は頭を掻いた。素敵な彼女にも出逢えたわけだし、寧ろ良いこと尽くめの筈だ。

本鈴が鳴る前に、僕は校舎内へ戻ることにした。

彼女はまだ同じ場所で空を見詰めていた。

そんなことがあった数日後、僕はまた屋上へ行った。死ぬ気なんぞはもう綺麗さっぱり無く、ひよっとしたら彼女に会えるかもしれないと期待を込めて、だ。

今日は曇っていて、今にも雨が降りそうな天気だ。重そうに雲が垂れ込めていたけれど、僕は彼女に会えるような気がしてならなかった。

この間と同じように、給水塔の裏へ回る。

案の定、というのもおかしいけれど、彼女はそこに居た。今度はこちらを見てくれた。

「あのっ……」

いきなり話し掛けて、変な奴だと思われはしないかと懸念が頭を擡げる。しかし声を発してしまった今、それは今更だ。ええいと腹を括って、僕は言葉が続けた。

「この間、ここに居ましたよね。あの、僕、自殺しようとしていた……」

しまった。あの時彼女は僕に目もくれなかったではないか。

彼女が黒い目をぱちくりとまばたかせる。

「ああ。フェンスの鳴った、晴れた日かしら」

「そうです……!」

彼女はころりと笑って、あれは死のうとして

いたのね、と言った。

「あなたの御蔭で僕は自殺を思い留まることができました」

「まあ、そうだったの。私何にもしてないのに」
「ありがとうございます、と頭を下げると彼女はもう一度目をぱちくりさせて、笑った。可愛らしい方だと思った。」

「それにしても、横で人が死のうとしていたのにずっと空を見上げていたのは、何か理由が？」

「雨が降らないかしら、と思っていたの」

「そうやって彼女は空を見上げる。僕もつられて上を向く。相変わらずの曇天は、全く晴れる様子が無い。」

「今日は降りそうですね」

「そうね」

降ると良いわ、と彼女は言う。雲を眺める彼女の横顔は美しかった。

雨を望む彼女には申し訳ないけれど、今の僕はあまり降って欲しいとは思っていなかった。

うっかり傘を忘れてしまったからだ。彼女に会えたし、お礼も言うことが出来たので、本当に降り出さないうちに僕はおいとますることにした。

「また会えますか」

と訊いたら

「雨の日が良いわ」

と答えた。

これから梅雨の時期に入るから、きっとまた会えるだろう。

それからまた幾日が過ぎて、やがて梅雨が訪れた。

友人や周りの人達は鬱陶しがっていたけれど、僕は彼女に会う機会が増えると思うと心が弾んで仕方がなかった。

湿った匂いが濃く立ち込めて、水風船を破るように雨が零れ落ちて来そうな黒空の日。帰りのホームルームを終えた途端、僕は屋上へと駆け出した。彼女の定位置、給水塔の裏を覗けば、彼女はこちらに笑いかけた。

「こんにちは」

「こんにちは。良い天気ですね」

「そうね」

彼女は心底嬉しそうに黒雲を見上げる。水の粒が落ちてくるのを今か今かと待ち侘びている。子供のようにな无邪気なその横顔を、僕は本当に可愛いと思う。

「雨、好きですね」

「好きよ。大好き」

一瞬どきりとする。

その言葉が僕に向けられたものではないことはこれ以上無いくらい判っていたが、それでも胸を高鳴らさずにはいらなかった。

ごろごろ……と遠くで音がして、ぱたっ、ぱたっ、と大きめの黒点がコンクリートに染み始める。

僕が傘を広げて頭上を覆ったと同時に、土砂降りの雨が落ちて来た。うひゃあと思わず声を上げる。そのくらい勢いが激しいのだ。フェンスの向こう側が白く煙って見えない。

彼女はといえば、傘も差さずこの雨の中に立ち尽くしている。ずぶ濡れになった彼女の立ち姿は、なかなかどうして凛として美しい。

それでも風邪を引いては大変と、僕は傘を差し掛けた。身を打つ雨粒が遮られたのを感じてか、彼女が僕をちらりと見遣る。

「優しいのね」

「具合が悪くなるといけませんから」

「でもあなたが濡れてしまわないかしら」

「大丈夫です。傘、大きいですから」

「ありがとう」

彼女は笑い、白い景色へ目を戻した。僕も同じ方向を眺める。

今まで僕は他の友人達と同じように、雨の日

持ち悪い思いをしたことは多々あったし、外で遊ぶことが出来なくなるのも嫌だった。

けれど彼女と雨の景色を共有することで、僕は雨を好きになれそうな気がしていた。

水中とは違う、けれど水に浸った周囲。ざあざあというより、ごうごうという雨の音。水の匂い。土の匂い。嫌でも肌を感じる飛沫と、ひんやりとした空気。

全身で体感する。雨はひどく心地良い。それはこの雨の風景を眺めることに集中している所為と、何より彼女が傍に居るからだ。彼女があまりにも楽しそうに雨を見ているから。

「雨って素敵よ」

珍しく彼女から口を開く。雨で気分が高揚しているのだろうか。

「この音も、匂いも、冷たさも、風景も、全てに心躍るわ」

「はしゃぐような彼女の口振りに、僕は頷く。」

「帰り道に、紫陽花が咲いてるんです。きつと雨に濡れて綺麗でしょうから、見に行きませんか」

「素敵ね。是非一緒に歩きたいわ」

そうして僕たちは土砂降りの雨の中、一緒に帰ることになった。道中彼女は傘を遠慮した。濡れてゆきたいのと言う。それを止める権

利も勇気も僕には無いので、僕一人が傘を差すかたちになってしまった。うん、何とも恰好が悪い。しかし彼女がそれで良いと言うのだから仕方が無い。

並んで歩いてゆくと、ほどなくして紫陽花の群れが見えてきた。

彼女は目を輝かせて駆け出す。「まあっ。なんて綺麗な」

花卉のように広がる青紫の萼の塊が、葉に囲まれていくつも咲いている。濡れた青味はしっかりととして、それでいて色鮮やかだ。

「喜んでもらえて良かったです」

毎年梅雨の時期の背景であった紫陽花を、彼女と目に向けてみるだけで違って見えた。この花は、こんなにも鮮烈だっただろうか。賑やかな雨音と、彼女の笑顔も相俟って、僕は浮かれたようになる。

「今日はどうもありがとう」

「途中まで送りましたよ」

「あら、こんなに至れり尽くせりで良いのかしら」

「僕がしたいだけです」

「せっかくだけど、気持ちだけ受け取っておくわ。家、ここから近いのよ」
そう言うと、引き止める間も無く彼女は水溜

まりを跳ね飛ばして行ってしまった。
雨音を割るように、僕は声を張る。

「また、会いましょう。雨の日に」

彼女は一瞬足を止めると、ちらりと振り向いた。
そして大層麗しい笑みを残して雨の中に消えて
行った。

それから沢山の雨の日を、僕は彼女と共に過
した。

小降りの日も、霧雨の日も、しとしと降る日
も、針のような雨の日も、天気雨の日も、台風
紛いの日も。

学校の中庭にも紫陽花を見付けて、それを見
に行きもした。

彼女と雨の日を謳歌しているうちに、僕はど
んどん彼女に魅了されていった。可愛らしい仕
草や表情、時折見せる子供のような無邪気さ
に、僕は惹かれたのだ。彼女と居ると、落ち着
くと同時に胸の奥がぎゅっと絞られるような
感覚を覚える。少し苦しいけれど、じわりと広
がる温もりがある。

気付けば僕は、彼女のことを堪らなく好きに
なっていた。

少しずつ、少しずつ、雨の降る日が減って

って、べたつくような蒸し暑さが目立ち始めた
ある日、僕は朝のニュースで梅雨明けを知った。

周りの人々は喜んでいようだったけれど、
僕は少なからず落ち込んだ。

だつてきつと、彼女と会える日が減ってしま
う。

気落ちして家を出ると、ぬるい風が吹いてい
た。ふと空を見上げると、広い青空で雲がうね
っている。ぐいぐいと絶え間無く姿を変え続け
るその向こうに、雲の山を見た。僕はにんまり
する。夕立が、来る。

僕は最後に彼女と過ごした日の会話を思い出
していた。

「もうすぐ夏になりますね」

「そうね」

「雨の日は、減ってしましますね」

「そう、ね」

「晴れている日は嫌いですか」

「強い日射しが苦手なの」

「ここは日陰が少ないですからね」

「ええ」

「この間の紫陽花の群れの近くに、大きな木が
ありましたから、あそこは良い日陰になると思
いますよ」

「あら本当」

「はい。もしよろしければ、ですけど、……次
の雨の日はあそこで会えませんか」

「もちろん、喜んで」

傘を取りに一度家へ戻って、大急ぎで学校へ
駆けた。

ところが僕の予想を裏切って、その日は丸一
日晴れていた。ただの荷物になってしまった傘
を、途方に暮れたようにぶらつかせて帰る。

「お前何で傘持って来たの」

「夕立が来ると思ったんだ」

友人の問いに素直に答えると、そいつは、あ
あ、と納得したような声を発した。

「朝、入道雲あつたもんな」

でも良かったじゃん晴れて、と彼は言った
が、今の僕にとってその言葉は慰めにはならな
い。僕は雨を望んでいるのだ。

当然それは口にせず、僕は寂しい思いを抱え
て帰路を辿った。

途中、あの紫陽花のところへ寄ってみたけれ
どやはり彼女は居なかった。

それからさっぱり雨は降らなかつた。

降り尽くしてしまったかのように、梅雨明け
の日を境に快晴ばかり続いた。

暑いのは嫌だけれど雨よりましだと、勝手に

ことを周囲は言う。晴れるにこしたことはない、と。

去年までの僕ならばそう言っていただろう。しかし今は違う。雨の日の楽しみを、僕は知ってしまった。

彼女に会えない日々は、寂しさと恋しさを募らせる。

気休めにと幾度か例の紫陽花の群れを見に行つたけれど、彼女は一度としてそこに居たためしはなかった。また、盛りを終えた紫陽花は日に日に鮮やかさを失つて、からからと干乾びていくように生氣を失くしていく様子は、僕の寂しさに拍車をかけた。

ひょっとして、と覗いた屋上の給水塔の裏は毎回見事に蛻の殻で、僅かに抱いた期待の分だけ僕に恋しさを齎した。

最後に会話をしたあの日、僕は次に会う時に彼女に想いを伝えようと決めていたのに。

そして、別れは突然やつて来た。

苦しい夏の日も流石に僕を憐れんだのだろうか。

ある日、夕立があつた。

常備している折り畳み傘も広げず、僕は一目散に例の場所へ駆けて行つた。

やっと、やっと彼女に会える。ずぶ濡れの僕を見て、彼女は笑うだろうか。彼女自身も雨に打たれながら。

泥が跳ねるのも厭わず、僕は走る。

枯れた紫陽花のところに着いた途端、僕は深めの水溜まりに足を突っ込んで盛大に水を跳ね散らかした。構うものか。

しかし彼女は居なかつた。まだ来ていないのだろうか。いつもならば彼女が先に居るのだが。

日陰になると言つた大きな木の下へ行く。少しだけ雨が遮られた。

自分の服装を見直してみると、酷い有様だつた。カッターシャツはぐしよ濡れで肌張りつき、ストラックスには跳ねた泥が大量に付着して

いる。靴もどろどろで、靴紐が解けていた。僕は相当必死になつていたようだ。あまりのみつともなさに彼女も呆れるかもしれないと思つて、一人苦笑する。着替えも無いし、仕方無く

その恰好のまま彼女を待つことにした。

ところがいつまで経つても彼女は現れない。

おかしいなあと首を捻り、交差していた足を組み替える。ぐしゅり、と靴が鳴った。冬だつたら確実に爪先の感覚が無くなっているくらい、足元の濡れ具合は酷い。

することも無く地面を見詰めていると、ふと

紫陽花の茂みの下に何か落ちていたのを発見した。ごみか、落ちた葉か。近くまで寄つて確かめる。

——彼女だつた。

頭が真っ白になる、瞬間。

蒸し暑い筈が急速に身体が冷えてゆく。

どうしてどうして。

僕は彼女の亡骸を拾い上げる。雨に濡れたぐちゃぐちゃの皮膚は、乾いていたことが窺える。

まさか彼女は、ずっと僕を待っていたのだろうか。今日の朝からと言わず、あの梅雨明けの日から。

違う。

彼女は、あの梅雨明けの日に死んだのだ。

彼女が夕立の気配を遠える筈が無い。あの入道雲は確かに雨を齎す筈だったのに、どうい

うわけか降らさなかつた。けれど彼女はきつと僕が入道雲に気付くだろうと、信じて待っていた。事実僕は気付いた。そして待ち合わせ場所へ来た。しかし、遅かつたのだ。その時にはも

う彼女は、惨いことに轢死していた。僕を待っているうちに轢かれたに違いない。彼女の遺骸が目

に留まらなかつたのは、紫陽花の茂みが陰になつていたから。

ああ今は彼女の死因などどうでもいい。彼女

は死んでしまった。あの美しく可愛らしい彼女は、こんなにも無残な姿になってしまった。

僕は泣いた。形振り構わず、夕立の勢いに負けないほど激しく咽び泣いた。雨垂れか涙か判らない雫が頬を伝ってゆく。そのごちゃ混ぜの雫が手の中の骸を更に濡らす。

好きだと伝えたかった。募り積もった恋しい想いを、彼女に伝えたかった。

僕を救ってくれた彼女。僕に雨の日の楽しみを教えてくれた彼女。僕と過ごしてくれた彼女。亡くして初めて、こんなにも狂おしく彼女を愛していたことを知る。

雨足が弱くなつてゆく。僕の涙は止まらない。彼女の亡骸を胸に抱き寄せて、好きだ、と呟いた。届く筈も無い愛の告白を繰り返した。木の下に戻り、土を手で掘る。湿り気を帯びた土は軟らかく、楽に掘ることが出来た。その中に彼女を横たえ、そつと土を被せる。この場所なら日陰になるし、彼女が綺麗だと言った紫陽花もよく見えるだろう。小さな板を探して来て、墓標にする。刻んだ碑銘は——蛙嬢の墓。

雨降る日々、僕は確かに恋をした。

(とても可愛く、無邪気な蛙に——)